



少年少女 歸省の日

永代 美知代

梅雨晴れの暑かしい日が、幾日となく続きました。
「おもうあんなにつばみがついた、この花が咲くと、お互にお郷里へ行けるのねえ」
校庭の狭竹桃の花咲く七月のお、その日をどんなに待ちわびたことぞう！
「あなた何日御出立？私ね、試験が済むとすぐ、その日の夜汽車で行きますわ」
「アラ終業式はなさらないの？だって叱られやしないこと？」
「……さうね、だけれども私、もう一歸り度くつて、仕方がないんだもの」
「それは私だつて同じよ、それどころか、魂はもうとくの昔お郷里へ飛んでつしまつてゐるわ」
「ホ、そいぢや抜け作でお試験をなさるおつもり？」
「え、だからどうせ平均點以下かもしれないわ」
「仰有ること」
誰も彼もお話は皆、歸省のことでもちきりです。
寮から講堂への往復に、さては寮の出入り毎に眼をひく薄紅い狭竹桃の、日毎に色増す花を、寮生の皆が大騒ぎしてよろこぶ中に、睦美はたつたひとりで、やるせない吐息にくれました。
あつさきびし折柄、御伯父上様、御伯母上様御變りも御は

さす候やなど、蔭がならお案じ申上候
さて追々夏休みも近づき候ところ、七月二十三日より御宅へ歸り、赤様のお守り致してもよろしや、御返事まちあげ候
御伯父上様 睦美 拜
御伯母上様
なほ終業式は七月二十三日に御座候
睦美はこれだけの手紙を書くに
も、幾度ためらつたか知れませんが、日と近づく夏休み、友達との楽しげな歸省の噂を聞くにつけ、そゝるやうな思ひ切つて書きました。そして伯父様からの返事を待ちました。
楽しい筈の夏休みも、睦美には一苦勞です。幼いころ父母を失つた睦美は、歸省のべき家と云つて、此伯父伯母の許より外にはありません。亡父が基督教の牧師であつた關係から、宣教師の手には救はれた二十歳までの約束で此女學校へは入れられました。それが、それとも僅かに學資の補助を受けるばかりです。休暇の短き冬休みや春やすと違つて、夏休みの間中自分一人學校に居残つて世話になるわけには参りま



せんでした。
睦美はどうしても伯父様の家へ歸らねばなりません、ですけれど伯父様の家の萬事にとほしい勝ちな生計を思ふと、その貧しい中へ自分までが餘計な負擔をかけるに忍びない。
「私も可哀相だけれども、伯父様も可哀相だ」
睦美は賑やかな友達の前から離れて、一人淋しく窓際に寄るのが常でした。
伯父様からの返事は、終に終業式の其朝までも参りませんでした。
互に別れて、家路にむかふ何處に行くと、共にうけるる學の光を輝かしめ、寮の部屋々々から美しく、もの淋しい、そして何處となく樂しげな合唱の聲が流れる――
睦美は涙もなく涙を誘はれて泣きました。
氣早やな人達は、早もうサヨナラサヨナラを繰り返して校門を後に伸を走ります。(をほり)